

僕が 歌津にいた 理由

蜘蛛瀧仙人

“IN TO THE WILD”
in the memory of AKIHIKO YAWATA known as
NORITO “SPIDER” KUMOTAKI 1962-2014

RQ聞き書きプロジェクト



刊行の言葉

八幡明彦やわたあきひこの南三陸での活動を記録した、RQ聞き書きプロジェクトの『蜘蛛瀧仙人——僕が歌津にいた理由』が刊行される運びとなり、大きな喜びを感じます。明彦は私ども夫婦の長男で私の両親にとっても初孫でした。アメリカで生まれ、現地の教会で洗礼を受けたので、家族、親族の間では「ピーター」という洗礼名をそのまま名乗っていました。アメリカで生まれたこと、彼の祖母が音楽専攻で耳が良かったことから、彼自身もマルチリンガルで3カ国語を操っていました。友人・知人の中には韓国、香港、シンガポールの人たちが多くいました。

明彦の生涯は3つの時代に大別できます。生まれてから大学を卒業してキリスト教の関係団体で仕事をした時代、クモの研究に没頭した時代、そして震災が起こって南三陸で主として子どもたちとかかわって支援した時代です。この本では最後の短い、しかし彼にとっては充実した時代を扱っています。

南三陸では歌津の子どもたちに自然の恵みと脅威について経験させ、災害に強い人材を輩出しようとして試みていたようです。先人の知恵に学び、けものみちを辿って避難通路を確保するなど、子どもたちにとっては面白い冒険でもあったのでしょう。「歌津てんぐのヤマ学校」と名付けて学校の

帰りや休日が集まっていたようです。また、それが認められて小学校でも校外活動について考える機会をもらっていたそうです。高校生のころから人に教えることが上手で、いつでも弱い立場の友人や弱者を慮っていたものです。その意味では生涯キリスト者としての道を歩んだといえます。

もともと南三陸では田東山たつがねさんにある3つの滝のひとつ蜘蛛滝くもたきに因んで蜘蛛仙人と自称し、滝に打たれて行をするなど修験者のようなこともしていたようです。作務衣を着て頭を丸めた風貌は土地の人たちにも変わり者と映っていたそうです。

明彦がクモに傾倒するようになったのは小学校5年生の折、横浜の自宅で朝早くジョロウグモが張った網に朝露がかり、朝日にキラキラ光っていたのに魅せられ、こんなに美しいものを創造できる生物がいることに感動した時からです。感受性の強い一面を表すエピソードとして忘れられませんが。

その後長じて京大の理学部に進み、親バカの一心で将来は数学のノーベル賞といわれるフィールズ賞を取れるかも、などと思ったのも束の間、数学専攻から生物専攻に移ってしまっただけです。その時の弁は数学野郎には人間味がない、俺はもともと人間臭いことをしたい、でした。かくして生物学者の明彦が誕生したのです。専攻は無脊椎動物、論文は野鼠の行動だったと記憶しています。クモはもちろん無脊椎動物です。そしてクモは大変弱い生物で環境の変化にも敏感に反応するので、これは環境の指標になるのではないかと思いついて研究を続けたようです。

南三陸に移ってもクモの研究を継続し、歌津でウタツホラヒメグモと名付けられた新種を発見し

ています。

私と明彦、それに娘の眞澄はスキューバダイバーで、海外に出かけてはダイビングを楽しんだものですが、彼だけは必ずと言っていいほどクモ探索に数日を使っていました。朝早く起きてはクモ探しをしてから朝食を一緒にして潜りに出かける、という日も多かったです。

今となっては帰らぬ思い出ですが、その一つひとつがいかに明彦らしい思い出です。刊行されるこの本はそのような思い出を誘ってくれる名著となるでしょう。ただの思い出だけではなく、ボランティアとして悩んでいた明彦の心中にも触れていただき、人間臭さの記述があるのもリアルで素晴らしいと思います。

最後になりますが、この本の出版を可能にくださったRQ聞き書きプロジェクトの久村美穂さん、明彦をお仲間にしてくださったRQのメンバーの方々、伊里前小学校の関係者、子どもたち、そして子どもたちを送り出してくださいました親御さんたちに感謝をささげます。

2015年5月

八幡恵介

はじめに

スパイダーこと蜘蛛仙人（本名・八幡明彦）さんは、東日本大震災の津波被災地・南三陸町歌津で出会ったボランティア仲間でした。そして、歌津でのスパイダーの支援活動の記録を子どもたちのために残す、それが私たちRQ聞き書きプロジェクトと彼との生前からの約束でした。今ここにその約束を果たし、天国の彼に捧げることができるとしても嬉しく思います。

彼は少々風変わりな風貌と行動で知られていました。大津波の爪痕深い被災現場から山一つ越えた窪地「さえずりの谷」にテントを張って、子ども支援の活動に乗り出したのです。そのころは、周囲は瓦礫撤去や物資配布といった短期的な緊急支援にばかり目が行きがちで、子ども支援の必要性がなかなか理解されずに苦労したかと思えます。理解ある人々も活動の行く末について、大丈夫なのか、どうなることかと見守っておりました。けれど、自分で声を上げることのできない子どもやお母さんには、この支援が本当に必要なことだと理解していたスパイダーは負けずに進んでいきました。

当時の現地活動の説明会でもなんとか必要性について分かってもらおうと、真剣な表情で、必死に訴えていた姿が目には焼き付いています。彼の考えが相手に伝わったのは、言葉よりもその誠実な

行動でした。少数精鋭のサポーターとの活動が定着するにつれて、子どもたちの絶大な支持と親御さんたちの理解によって、学校との連携、地域の他団体、県外の支援といったつながりが生まれ、それと共に彼の表情も柔らかくやさしく変わっていったような気がします。

被災地でのボランティア同士は、それぞれのバックグラウンドや肩書きなどの垣根を越えて、対等に手を取り合うことができる特殊な環境にありました。逆に言えば、仲間うちではプライベートの姿をほとんど知らない人が多かったことでしょう。よき父、賢明なる学者、敬虔なクリスチャンなどいろいろな側面を持った人であつたらうけれども、その部分を知るには残念ながら、彼と過ごした時間は短すぎました。

この本では、さえずりの谷にて2013年6月、その後11月にもう一度行われたRQ聞き書きプロジェクトによるインタビューとヤマ学校のブログ、彼自身のフェイスブックの記事を中心に、3年間のあゆみを再構成してみました。この短期間に彼がこの地に撒いた種が実にたくさん芽を出し、多くの仲間を集めていることに改めて驚いています。彼自身の言葉を読み返して「ふるさとってなんだ、自然ってなんだ、僕たちが守るべきものってなんなんだ？」という声が聞こえてくれば幸いです。

2015年5月

RQ聞き書きプロジェクトメンバー一同

蜘蛛仙人 略歴

西原廉太「聖アンデレ教芸」

本名、八幡明彦。1962年8月13日、父の留学先のニューヨーク州シラキュースで生まれる。同年、キリスト教の洗礼を受ける。洗礼名はペテロ（英語セビーター）。

帰国後、神奈川県立緑ヶ丘高等学校を経て京都大学理学部に進み、在日コリアン居住地域での児童支援活動、日韓問題やホームレス問題を含む当時としてはタブー視されがちな社会問題などに取り組み、キリスト教精神に貫かれた行動的で時として攻撃的な大学生活を送った。その後、学生時代に社会貢献活動を通じて知り合った女性と結婚、2女に恵まれる。

自身の所属するキリスト教団体の国内・海外幹事を歴任し、将来を嘱望されたが、上級幹事との軋轢が原因で帰国、以後キリスト教関係者と一線を画し、クモの研究に没頭するようになる。「ささがにの郷、ピオトープ研究所」勤務を経て、2011年、東日本大震災発生後に宮城県本吉郡南三陸町歌津にRO市民災害救援センターのボランティアの一員として入る。クモ好きの「スパイダー」のキャンブネームに加え、のちに蜘蛛仙人の俗称を名乗り始める（葬儀の時まで本名を知らなかったという人も地元歌津に多くいた）。地域に暮らす方の暮らしぶりや地域特性を知り、地域の児童教育の支援の必要性を痛感。同年、「歌津てんぐのヤマ学校」

を主宰し、子どもたちとマイキャンプや野外体験を通じ、地域の文化や伝統・自然の恵みに対する目を養うべく尽力した。その傍らクモの研究者として歌津で新種のクモを発見、「ウタツホラヒメグモ」（日本蜘蛛学会）と命名される功績を遺した。

地元の小学校やNPOと連携した活動を展開していた矢先、2014年5月31日に交通事故で死去。享年51歳。200人を超える歌津の子どもたちや保護者、学校関係者、ボランティア仲間などに見送られながら旅立った。後日東京の教会で行われた通夜・葬儀では、友人・知人・ボランティア仲間など多くの人が訪れ、早すぎる別れを惜しんだ。

最後まで社会的に弱い立場に置かれた人々のことに思いを寄せ、強い信念と情熱で行動した一生であった。同時に、家庭においては子育てや家事にも全力を注ぎ、家族に忘れられない思い出を多く残したよき夫、よき父親でもあった。



蜘蛛瀧仙人——僕が歌津にいた理由「目次」



刊行の言葉——003

はじめに——006

蜘蛛瀧仙人略歴——008

ブログ

2011年春▼▼歌津とスパイダーをつないだもの 017

大津波の被災地、南三陸町——018

出番を待つスパイダー——019

第1章

2011年夏▼▼歌津の魅力を知る 023

すごく評判の悪いボランティアだった——024

スパイダーから蜘蛛瀧仙人へ——026

バーベキューでコミュニケーション——027

第2章

歌津の伝統文化の素晴らしさを知る	029
さえずりの谷との出会い	033
「被災地に来てキャンプかよ」の声にも負けず	036
子どもキャンプ実現——クモ仙人誕生	039
歌津の子どもはお祭りを身体と心で記憶していた	040
「ヤマ学校」の復活——「歌津てんぐのヤマ学校」の誕生	044
てんぐと本気で遊ぶ子ども	049
地元の学校の理解と協力を得る	055
子どもたちと保護者で作るキャンプ	057
2011年冬 ▼▼ 歌津の冬越えに挑む	061
子どもたちのRO跡地見学ツアー	062
歌津町民となる	065
歌津で伝統の年越しを教わる	068
寒さを知ること、3月11日の被災地を体験すること	074

2012年春 ▼ 一歩ずつ前進の手ごたえを得る 079

津波から1年、三嶋神社の子ども神輿、手作りで復活! 080

隣村・鱧淵との交流 087

何も無い状況で「自分に何ができるか」を考える 089

伊里前川の奇跡 —— シロウオの帰還 092

2年目の活動に「山の道プロジェクト」が加わる 101

「被災地で学ぶ」キャンプ開催 104

洞の浜のヤマの道づくり 108

地域の宝探し 112

アサザ基金・飯島さんと「生き物の道とつながりの大切さ」を考える 113

2012年秋 ▼ 秋からの転機、そして試練 123

子どもたちの夢、ヤマ学校のねごバス誕生 124

生活しながら長期の活動を続けることの難しさ 127

一人になり大きく体調を崩す 132

第5章

2013年春 ▼ ▼ ▼ 広がるつながりの輪

149

歌津での2度目のお正月 ————— 138

歌津へ1カ月ぶりの帰還 ————— 143

愛娘の活動アシストで「故郷への視点」に気づく ————— 145

シロウオ泳ぐ伊里前川に鯉のぼり、はためく ————— 150

子どもたちで作る鱒淵キャンプ ————— 155

三嶋神社の大祭の完全復活 ————— 158

歌津の未来のために学ぶ ————— 161

メダカ救出作戦から「生き物のつながり」を学ぶ子ども ————— 163

クモ研究への情熱と大発見 ————— 167

第6章

2013年冬 ▼ ▼ ▼ さえずりの谷との別れ

179

「大人気ない」天人、スパイダー ————— 180

田東山への8つの古道を探して ————— 187

2014年春 ▼▼ 春風の連れてきた仲間たち

207

子どもたちの山猫バスの運転手に ————— 194

さえずりの谷からせせらぎ荘へ ————— 200

寒さを楽しむ暮らしと「てんぐの湯」始動 ————— 203

あるきんぐクラブ ————— 208

なつかしいボランティア仲間の来訪 ————— 209

チーム日光&チーム萑高 ————— 212

シーカヤック・八幡暁さんらの「海遍路」 ————— 212

南三陸わらすこ探検隊 ————— 214

あとがき ————— 220

スパイダーの見つめていた歌津の小さな生き物たち ————— 223

引用について

・本書では、スパイダーが残した記録を以下から引用し、文頭に掲載（送信）日とマークを付けた。



RO市民災害救援センター宛のメール



RO市民災害救援センター「歌津センター」ブログ <http://www.rq-center.net/blog/utatsu>



「歌津てんぐのヤマ学校」ブログ <http://utatsu.blogspot.jp/>



フェイスブック「蜘蛛仙人（八幡明彦）」 <https://www.facebook.com/kumotaki>

・スパイダーはフェイスブックを日記代わりに利用していたが、過去の出来事を日付を明示せずに書くことが多かった。文脈上、日付を特定したほうが内容を理解しやすい場合は、文中に角括弧「」で記載した。同様に、補足説明が必要と思われる箇所も「」で記載した。

・1日に何度も小分けして書き込まれた記事を引用する際は、同一日付で文章をつなげた場合がある。

・引用箇所は、編集上、前後や一部の文章を省略した場合がある。「省略」「中略」などは特記していない。

・誤字脱字、誤謬、不正確な名称などは修正し、必要に応じて用事用語の統一、改行位置の調整などを行った。

・姓や名だけの人名は、初出部分で正式な姓名に変えた場合がある。

・写真は、本人が掲載したもの（借用と思われるもの、第三者がスパイダーの記事に投稿したものを含む）のほかに、編集部が独自に撮影したもの、協力者やRO市民災害救援センター（RO災害教育センター）から提供されたものを使用した。

・本人掲載の借用写真は分かる範囲で掲載許可を得たが、提供者不明のものもある。掲載に不都合がある場合はRO聞き書きプロジェクトまでご連絡いただきたい。

取材

岩淵恵子

久村美穂

黒田佑次郎

坪野圭介

平田美和子

文・編集

久村美穂

ブックデザイン・DTP・編集協力

山中俊幸（クールインク）

プロローグ

2011年春 ▼▼
歌津とスパイダーをつないだもの

大津波の被災地、南三陸町

南三陸町は石巻市と気仙沼市に挟まれて、まるで海を抱きかかえるような形をしています。この地の歴史はなんと2億年以上前にさかのぼり、ウタツザウルスやアンモナイトなどの古代生物の化石が出土しているほか、縄文時代の皿貝遺跡など価値の高い史跡が発掘されているほど、古来生き物の生活に適した場所でした。

緑豊かな森の栄養を清流が海へ運び、それによって海の幸が育つという生態系の絶妙なバランスと、東北にありながら比較的穏やかな気候とをあわせ持っているのが南三陸町です。なかでも歌津は、漁業を主産業として発展してきました。元禄時代に町の区画が整備され、そのなごりは今も屋号などに引き継がれています。住民は「契約会」という互助会を中心に地縁共同体の強いつながりで結ばれ、祭りや信仰の伝統を大切に守って暮らしていました。

ところが2011年3月11日の東日本大震災による大津波により、歌津の古い町並みは津波に呑まれて壊滅的な打撃を受け、主要交通網であったJR気仙沼線と国道45号線はずたずたに引き裂か

れ文字通り陸の孤島となりました。公的な支援が進まない中、歌津の人々は強いつながりと知恵と工夫で、誰も経験したことのない苦境に立ち向かっています。

やがて、震災直後から津波の被災現場に入っていた民間のボランティア団体の中に、内陸部の登米市に拠点を借りて、公的支援の届きにくくなっていった南三陸町歌津、気仙沼市小泉、同・唐桑、石巻市河北などの沿岸部を支援するところが現れました。それが「RQ市民災害救援センター」（以下RQ）でした。そこに集うボランティアは自然学校の担い手を中心でした。地域に負担をかけず、自発的に自己責任で行動できることをモットーに、支援物資の配給や片付け作業などの手伝いを始めたのでした。

出番を待つスパイダー

スパイダーは東京の自宅で、次々と報道される東北沿岸部の津波被災の悲惨な状況に心を痛め、自分にできる支援とは何か必死に考えながら、この地へ支援に行けるタイミングをじつとかがっていました。

4月に参加したRQのボランティア説明会・報告会で「個人で参加できて、組織的な縛りがあまりない」という姿勢を知って賛同し、参加することを決め、早速応募します。応募に際し彼がRQに送ったメールのメッセージは次のようなものでした。

2011年
4月19日



4月14日の報告会を聞きました。自然学校の活動には以前から関心がありましたが、知っているいくつかの団体がそのスキルを生かして効果的な支援をしていることを知りました。RQはボランティアを活用する仕方をよく心得ていて、地域的にもサポートが手薄なエリアを担当し、長期的支援の見通しも立てようとしているので、ぜひ応援したいと思いました。

ところがすぐには被災地に入ることができませんでした。車の免許がない、という思わぬ理由からです。緊急支援期には大量の物資を短時間で多くの被災者に届ける必要があります、ボランティアにいつでも車を出せる状態が求められたのです。

本意ではありませんが、彼は状況の変化を忍耐強く待ちました。6月、再度RQのボランティアに応募し、ついに現地に入ることになります。

RQには応募の時のとても彼らしい熱いメールが残っていました。

6月1日



■ 自分のできること

・テントのみのボランティアセンターで寝泊りして活動する(1人)ボランティアが不足している場合なら、ぜひ。
・東南アジアの内戦地帯などを含む田舎で寝泊りした経験が何度もあるので、たいがいの環境には適応できます。

・携帯コンロを用いた自炊、あるいは調理場の手伝い(普段、兼業主夫をしています)。

子どもにも勉強を教えること(とくに数学と英語は得意です)。

・野山で虫や両生類・爬虫類の観察をすること。子どもが興味を持ってもらえるようなら。クモが専門です。専門領域として、里山保全に関わる研究をしているので、里山を片付けるという作業については、そこで見かける動物や虫などをチェックしつつ、片付けの肉体労働はいりません。

・神社・石仏など日本古来の信仰物にかかわる、若干の知識。実際どう役立つかわかりませんが、地元の人が大切にしているものを一緒に大切にしたいという思いがあります。

・マラソン。足だけは達者です。車で入れないアクセスの悪いところに5キロ走って行って見て来いと言われればやります。そういうニーズがあるかは知りませんが。住民がジョギングをしたいというニーズがあれば、ジョギング・リーダーをしてもかまいません。走るためのストレッチ運動は、日常のストレッチとしてもそこそこ意味があると思います。

・スパイダーマンの仮装。芸人ではないので芸があるわけではありませんが、仮装の衣装だけは持っています。もし子どもたちを喜ばすなどで、用途があれば、やれと言われたことをやります。

・ボランティア・リーダーは、施設ボランティア研修の企画などを若いころにしています。阪神大震災の時は、現場に長期はいませんでしたが、現場ボランティアグループのための資金援助を組織したりしたので、活動の内容は現地で見えています。小学生を相手にしたキャンプリーダーの経験はありません。いずれも「昔とった杵柄」ですが。

■いまなこいし

・自動車、バイクの運転（自転車は得意ですが）。

以上

今振り返ってみれば、彼はここに書いた「自分にできること」を全部出し切った有言実行の人でした。持てるスキルを、本当に惜しみなく使い切っただけでなく、「できないこと」自動車やバイクの運転」までも克服して、歌津に、そして南三陸で生きたのです。本書では、2011年6月に始まる彼の歌津での3年間の追います。



津波は海拔20メートル近くにある歌津駅を乗り越え、高台の伊里前小学校のグラウンドまで押し寄せた



伊里前小学校から歌津湾をのぞむ。海沿いの町は跡形もなく流された



漁業で使われる発泡スチロールの容器が道沿いに散乱。RQはその片付けも行った